

# 感染症発生動向調査事業における宮崎県の患者発生状況 —平成 19 年（2007 年）—

塩山陽子・山本正悟・河野喜美子

## Summary of the 2007 Annual Report according to the National Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases in Miyazaki Prefecture.

Yoko SHIOYAMA, Seigo YAMAMOTO, Kimiko KAWANO

### Abstract

The total report of influenza and pediatric diseases reported by the sentinel clinics and hospitals was about 105 per cent of 2006, 109 per cent of average report for the past five years.

There were great deal of the reports of Hand, foot and mouth disease, Herpangina, Respiratory syncytial virus in 2007.

There were few reports of eye diseases and target disease at sentinel hospital and not so many reports of a sexually transmitted disease.

Key words: Surveillance, Hand, foot and mouth disease, Herpangina, RS virus infectious disease

### はじめに

当所では、平成 11 年より宮崎県感染症情報センターとして、感染症発生動向調査事業に基づいて感染症情報の収集と解析を行ってきた。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民に還元し、感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている。

今回、宮崎県における平成 19 年（2007 年）の患者発生状況をまとめたので報告する。

### 調査方法

#### 1. 対象疾患及び定点医療機関

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（以下、感染症法）」で定められた 100 疾患を調査対象とした。

定点医療機関は、感染症発生動向調査事業実施要領に基づき選定した（Table 1）。

#### 2. 調査期間

全数把握対象疾患については平成 19 年 1 月 1 日から 12 月 31 日まで、定点把握対象疾患については 2007 年第 1 週から 52 週まで、インフルエンザについては平成 19/20 年シーズンの平成 19 年

41 週から平成 20 年 14 週までをそれぞれ調査期間とし、いずれの疾患も報告日をもとに集計した。

### 結果

#### 1. 全数把握対象疾患の発生状況

1) 一類感染症  
報告はなかった。

#### 2) 二類感染症

結核が 187 例報告された。患者が 118 人、疑似症患者が 52 人、無症状病原体保有者が 15 人、感染症死亡疑いの死体と感染症死亡者の死体がそれぞれ 1 人であった。男性 100 人、女性 87 人で、70 代と 80 代がそれぞれ約 2 割を占めた。

#### 3) 三類感染症

細菌性赤痢 1 例と腸管出血性大腸菌感染症 129 例が報告された。

細菌性赤痢の報告は、宮崎市保健所からの報告で、患者は外国籍の男性でパキスタンでの感染と推定された。

腸管出血性大腸菌感染症の報告数は 129 例で、前年とほぼ同数であった。また、全国的にみても人口 10 万人あたりの患者数は 11.24 と全国 2 位で、平成 17・18 年の全国 1 位に続き多い報告数であった。年間を通して報告されたが、6 月半ば

から9月半ばにかけての報告が多く、特に8月の感染者数は年間の約4割と多かった。また、11月には幼稚園での集団感染も報告された。原因菌の血清型は、O111が54例、O157が51例、O103が14例、O26が4例、O114・O119・O121が各1例、不明が3例であった。地域別では宮崎市(61例)、都城(34例)、延岡(18例)、小林(7例)、中央(5例)、日南・高鍋(2例)保健所から報告された。特に都城及び延岡保健所の報告は、保育園等での施設内集団感染があり、その規模も大きかったため、前年の2倍以上に増加した。

#### 4) 四類感染症

オウム病1例、つつが虫病29例、日本紅斑熱4例、レジオネラ症2例、レプトスピラ症4例が報告された。

オウム病の報告は宮崎市保健所からで、平成15年以来4年ぶりの報告であった。患者は30歳代の女性で咳がみられた。室内でインコを飼育していた。

つつが虫の報告は、前年(11例)に比べ大幅に増加した。この増加は皮膚科及び内科医に対し、厚生労働省のリケッチア研究班によるアンケート調査が実施され、全数報告の認識度が上がったからではないかと思われる。

前年、県北部を中心に流行がみられ、8件の報告があったレプトスピラ症は、今年は4件報告された。宮崎県では平成18年の調査結果から、パンフレット等を作成し、県民への啓発、医療従事者・獣医師等に対する講演会等を実施した。また、8月から11月には、ヒトとイヌの強化サーベイランスを実施し、本症への感染予防に取り組んだ。

#### 5) 五類感染症

アメーバ赤痢5例、ウイルス性肝炎2例、急性脳炎20例、クロイツフェルト・ヤコブ病1例、劇症型溶血性レンサ球菌感染症3例、後天性免疫不全症候群4例、髄膜炎菌性髄膜炎1例、梅毒18例、破傷風5例が報告された。

ウイルス性肝炎の報告は2例で、共にB型で50歳代と70歳代の男性であった。

急性脳炎の報告は20例で、男子が12人、女子が8人であった。1歳が最も多く6人、0歳が4人、2歳と9歳が各3人、5歳が2人、3歳と6

歳が各1人であった。病原体はインフルエンザAが7人、インフルエンザBとロタウイルスが各2人、RSウイルスとサルモネラが各1人、不明が7人であった。

劇症型溶血性レンサ球菌感染症の報告は3例であった。40歳代の女性2人と60歳代の男性1人で、血清群は全てA群であった。ショック、DIC、軟部組織炎等がみられ、60歳代の男性は感染3日後に死亡した。

後天性免疫不全症候群の報告は4例で、AIDSが1人、無症候期が3人であった。全て男性で、20歳代が2人、30歳代と50歳代が各1人であった。

梅毒の報告は18例で、患者が13人、無症状病原体保有者が5人であった。男性が12人、女性が6人、20歳代が12人、50歳代が3人、10歳代・40歳代・70歳代が各1人。早期顕症梅毒が11人、晩期顕症梅毒が2人であった。

## 2. 定点把握対症疾患の発生状況

### 1) インフルエンザ及び小児科対象疾患

報告総数は、前年の105%、過去5年間の平均(以下、例年とする)の109%と多かった。また、全国と比べても170%と多かった。

前年との比較では、手足口病が約4倍、ヘルパンギーナが約2倍、RSウイルス感染症が約1.7倍と多く、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、水痘、突発性発しんがほぼ同数、感染性胃腸炎、伝染性紅斑、風しん、百日咳が9割から約6割、流行性耳下腺炎、咽頭結膜熱が半数以下であった。

例年との比較では、手足口病が約1.8倍、ヘルパンギーナが約1.6倍、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎が約1.3倍と多く、水痘、伝染性紅斑、感染性胃腸炎がほぼ同数、突発性発しん、咽頭結膜熱、流行性耳下腺炎、百日咳が約9割から6割、風しんと麻しんは1割以下であった。

全国との比較では、手足口病、ヘルパンギーナ、流行性耳下腺炎、RSウイルス感染症が2倍以上、水痘、感染性胃腸炎、突発性発しん、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱は約1.9倍から1.3倍と多かった。伝染性紅斑、風しん、百日咳は約7割から約3割と少なく、麻しんは3%であった。

各疾患の発生状況の概要をTable 2に、経時的発生状況をFig.1に、地域的発生状況をFig.2に

示した。その概略は以下のとおりであった。

#### a) インフルエンザ Influenza

2007/2008年シーズンの報告数は、2008年第6週（2月初旬／定点あたり32.5）をピークに延べ14,047人、定点あたり238.1であった。前シーズン及び例年の約7割で、過去5年間で最も少なかった。また、全国と比較すると約1.7倍と多かった。

年間の発生状況をみても、流行の時期は例年どおりであったが、夏場も含めほぼ年間を通じて患者の発生があった。流行の初期には、Aソ連型（AH1）を中心に流行がみられ、後半にはA香港型（AH3）とB型による患者も確認された。

年齢別では、5歳以下が全体の38%、6歳から9歳が27%、10歳から14歳が17%、15歳から19歳が3%、20歳以上が15%を占めた。都城（定点あたり291.9）、小林（270.0）、高鍋（259.2）、宮崎市（258.7）、日南（244.2）保健所から多く報告された。

#### b) R S ウイルス感染症

##### Respiratory syncytial virus

定点あたりの累積報告数は34.2で前年の約1.7倍であった。1歳以下が約8割を占めた。特に延岡保健所管内（164.0）からの報告が多く、最も少なかった地域の約44倍であった。

#### c) 咽頭結膜熱 Pharyngoconjunctival fever

定点あたりの累積報告数は20.8で、前年の約4割、例年の約7割と少なかったが、全国と比べると約1.3倍と多かった。1歳が最も多く全体の約3割、1歳から3歳で約6割を占めた。日南（85.2）、延岡（23.8）、都城（21.2）保健所からの報告が多く、最も多かった地域と少なかった地域では報告数に約43倍の差がみられた。

#### d) A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

##### Group A streptococcal pharyngitis

定点あたりの累積報告数は118.4で、前年とほぼ同数、例年の約1.3倍であった。また、全国と比較すると約1.4倍と多かった。3歳から7歳で約6割を占め、延岡（410.8）、高鍋（134.3）、日南（119.4）保健所からの報告が多かった。

#### e) 感染性胃腸炎 Infectious gastroenteritis

定点あたりの累積報告数は581.2で、前年の約9割、例年とほぼ同数であった。また、全国と比較すると約1.8倍と多かった。例年よりやや早い

41週（10月初旬）から増加が見られ、45週（11月初旬）には県内全域で流行警報開始基準値（20）に達し、報告数の増加の状況から、ノロウイルスによる集団感染の流行が予測されたため、感染症週報等により食中毒や施設内感染に関する注意喚起を行った。年齢別では、1歳が最も多く全体の約2割、6ヵ月から5歳で約7割を占めた。小林（1038.0）、都城（799.6）、日南（740.7）、日向（610.0）保健所からの報告が多かった。

#### f) 水痘 Varicella

定点あたりの累積報告数は150.9で、報告数は前年とほぼ同数、例年の約1.1倍であった。また、全国と比較すると約1.9倍と多かった。1歳から3歳で約6割を占め、延岡（239.3）、宮崎市（179.0）、小林（152.3）、都城（151.7）保健所からの報告が多かった。

#### g) 手足口病 Hand, foot and mouth disease

定点あたりの累積報告数は88.6で、前年の約4.2倍、例年の約1.8倍、全国の約2.9倍と非常に多く流行の年であった。5週（2月初旬）の報告が最も多く、県内全域が流行警報開始基準値に達したが、2月から3月と6月から8月半ばに、流行が2回みられた。1歳と2歳で約6割を占め、延岡（117.8）、都城（115.7）、宮崎市（98.9）、高鍋（96.3）保健所からの報告が多かった。

#### h) 伝染性紅斑 Erythema infectiosum

定点あたりの累積報告数は17.3で、前年の約7割、例年の約1.1倍であった。また、全国と比べると約7割と少なかった。4歳から6歳で全体の約半数を占めた。延岡（47.5）、宮崎市・日南（20.1）、小林（19.3）保健所からの報告が多く、最も多かった地域と少なかった地域では報告数に約48倍の差がみられた。

#### i) 突発性発しん Exanthem subitum

定点あたりの累積報告数は60.6で、前年とほぼ同数、例年の約9割であったが、全国と比べると約1.8倍と多かった。宮崎市（87.3）、都城（71.7）、延岡（64.3）、高鍋（63.5）保健所からの報告が多かった。

#### j) 百日咳 Pertussis

報告総数は11人、定点あたりの累積報告数は0.3で、前年及び例年の約6割と少なく、全国と比べても約3割と少なかった。日向（6人（1.5））、宮崎市（4人（0.4））、中央（1人（0.5））保健所

からの報告で、3歳以下が4人、8歳から14歳が6人、成人が1人であった。

#### k)風しん Rubella

報告総数は2人、定点あたりの累積報告数は0.06であった。高鍋保健所からの報告で、共に0歳であった。

#### l)ヘルパンギーナ Herpangina

定点あたりの累積報告数は106.8で、前年の約2.1倍、例年の約1.6倍、全国の約2.6倍と多く、流行の年であった。27週(7月初旬)をピークに、5月下旬から9月半ばまで流行が続いた。流行の期間は例年とほぼ同時期であったが、ピーク時の報告数が例年の2倍と多かった。1歳が最も多く全体の約3割、6ヵ月から3歳で約8割を占めた。日向(192.5)、日南(150.6)、延岡(150.3)、小林(120.7)、都城(110.5)保健所からの報告が多く、最も多かった地域と少なかった地域では報告数に約21倍の差がみられた。

#### m)麻しん Measles

報告総数は1人、定点あたりの累積報告数は0.03であった。日南保健所からの報告で、ワクチン接種歴のある13歳の男子であった。

#### n)流行性耳下腺炎 Mumps

定点あたりの累積報告数は56.2で、前年の約半数、例年の約7割と少なかったが、全国と比べると約2.5倍と多かった。特に流行の時期はみられず、年間を通じて報告された。2歳から6歳で約7割を占め、高鍋(95.5)、日南(72.2)、都城(68.9)、小林(63.3)保健所からの報告が多かった。

### 2)眼科及び基幹定点報告疾患

報告総数は、前年及び例年の約半数と少なかったが、全国と比べると約1.4倍と多かった。

#### a)急性出血性結膜炎

##### Acute hemorrhagic conjunctivitis

報告総数は3人(0.5)で、前年及び例年の約1割、全国の約4割と少なかった。宮崎市(2人(0.7))と延岡(1人(1.0))保健所からの報告で、30歳代が2人と50歳代が1人であった。

#### b)流行性角結膜 Epidemic keratoconjunctivitis

定点あたりの累積報告数は72.3で、前年の約4割、例年の約半数と少なかったが、全国と比べると約2倍と多かった。宮崎市(98.4)、延岡(98.0)、都城(20.5)保健所から報告があり、20歳代から

50歳代で約6割を占めた。

#### c)細菌性髄膜炎 Bacterial meningitis

報告総数は10人、定点あたりの累積報告数は1.4で、前年の約8割、例年の約9割と少なかったが、全国と比べると約1.7倍と多かった。宮崎市(5.0)、延岡(4.0)、日南(1.0)保健所からの報告で、0歳と1歳から4歳が各3人、5歳から9歳と50歳代以上が各2人であった。

#### d)無菌性髄膜炎 Aseptic meningitis

報告総数は21人、定点あたりの累積報告数は3.0で、前年の約4割、例年の約6割と少なかったが、全国と比べると約1.7倍と多かった。宮崎市(9.0)、延岡(7.0)、日南(4.0)、都城(1.0)保健所から報告があり、9歳以下が約7割を占めた。

#### e)マイコプラズマ肺炎

##### Mycoplasmal pneumonia

報告総数は61人、定点あたりの累積報告数は8.7で、前年の約1.2倍、例年の約1.1倍と多かった。また、全国と比べると約4割と少なかった。延岡(37.0)と宮崎市(12.0)保健所からの報告が多く、1歳から9歳が約8割を占めた。

#### f)クラミジア肺炎 Chlamydial pneumonia

報告総数は1人であった。0歳の女児で宮崎市保健所からの報告であった。

#### g)成人麻しん Measles in adults

報告総数は1人、定点あたりの累積報告数は0.1であった。延岡保健所からの報告で、20歳代前半の男性。

### 3)月報告対象疾患

性感染症の報告総数は、前年の約8割、例年の約6割と少なかった。また、全国と比較するとほぼ同数であった。疾患別では、前年及び例年と比べて性器ヘルペスウイルス感染症と尖圭コンジローマが多いかほぼ同数、全国と比較すると性器クラミジア感染症、性器ヘルペスウイルス感染症、淋菌感染症が多かった。

薬剤耐性菌感染症の報告総数は、前年の約1.1倍、例年の約1.3倍と多く、全国と比較するとほぼ同数であった。疾患別では、全疾患ともに前年及び例年より多く、また、全国と比べるとメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症と薬剤耐性緑膿菌感染症が多かった。

a)性器クラミジア感染症

Genital chlamydial infection

定点あたりの累積報告数は33.0で、前年の約9割、例年の約6割と少なかった。また、全国と比べると約1.1倍と多かった。都城保健所(67.0)からの報告が多かった。20歳代が約半数、30歳代が約2割を占め、男性が6割、女性が4割であった。

b)性器ヘルペスウイルス感染症

Genital herpetic infection

定点あたりの累積報告数は10.2で、前年と同数、例年の約1.1倍であった。また、全国と比べても約1.1倍と多かった。年齢別では20歳代後半から30歳代が約半数を占め、性別では男性が約3割、女性が約7割であった。日向保健所(23.0)からの報告が多かった。

c)尖圭コンジローマ *Condyloma acuminatum*

定点あたりの累積報告数は4.9で、前年の約1.4倍、例年の約1.6倍と多かった。また、全国と比べると約8割と少なかった。年齢別では20歳代前半が約4割を占め、性別では男女同数であった。宮崎市保健所(9.3)からの報告が多かった。

d)淋菌感染症 *Gonorrhoea*

定点あたりの累積報告数は12.5で、前年の約6割、例年の約4割と少なかったが、全国と比べると約1.1倍と多く、平成14年以降、毎年、全国平均より多い状況である。年齢別では20歳代前半が約3割、30歳代前半が約2割を占め、性別では男性が約9割、女性が約1割であった。都城(31.0)、日南(21.0)、延岡(19.5)保健所からの報告が多かった。

e)メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* infection

定点あたりの累積報告数は56.3で、前年の約1.1倍、例年の約1.3倍と多かった。また、全国と比べても約1.1倍と多かった。宮崎市(92.0)、小林(75.0)、高鍋(72.0)保健所からの報告が多く、年齢別では70歳代以上が約7割を占めた。

f)ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

Penicillin-resistant *Streptococcus pneumoniae* infection

定点あたりの累積報告数は7.6で、前年及び例年の約1.1倍と多かった。また、全国と比べると

約7割と少なかった。年齢別では4歳以下と70歳以上がそれぞれ約4割を占めた。宮崎市(29.0)、高鍋(21.0)保健所からの報告が多かった。

g)薬剤耐性緑膿菌感染症

Multidrug-resistant *Pseudomonas aeruginosa* infection

報告総数は15人、定点あたりの累積報告数は2.1で、前年及び例年の約1.5倍であった。また、全国と比べても約1.9倍と多かった。宮崎市(8.0)、延岡(6.0)、日向(1.0)保健所から報告があり、年齢別では65歳以上が約8割を占めた。

4)その他

感染症法において、麻しん及び成人麻しんは定点報告となっているが、宮崎県では平成15年11月から全数把握対象疾患として届出を行っている。平成19年に定点報告以外で届出があった総数は18人で、延岡(7人)、宮崎市・高鍋(各4人)、都城・日南・日向(各1人)保健所からの報告であった。男性11人、女性7人で、1歳と3歳が各1人、17歳から19歳が4人、20歳代が8人、30歳代が4人であった。ワクチン摂取歴が有った者が7人、無し又は不明の者が11人であった。

## まとめと考察

5類感染症のうち、定点把握疾患のインフルエンザと小児科対象疾患の報告総数は、前年の105%、例年の109%とやや多い状況ではあったが、あまり大きな変化はみられなかった。しかし、疾患別にみると手足口病、ヘルパンギーナ、の報告が非常に多く、流行の年であった。

また、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、ヘルパンギーナでは、特定地域に偏った大きな流行が発生しており、感染症の流行に地域差が見られた年でもあった。

定点あたり報告数を全国と比較すると、報告総数は約1.7倍と多い状況ではあったが、疾患別にみると伝染性紅斑、風しん、百日咳は約3割から6割、麻しんは3%と非常に少なく、全国での流行とは異なっていたことが確認された。

眼科及び基幹定点報告疾患の報告総数は、前年及び例年の約半数と少なく、特に眼科疾患は約1割から4割と少なかったが、全国と比較すると約

1.4 倍と多かった。

性感染症の報告総数は、減少傾向がみられた前年の約 8 割，例年の約 6 割と減少した。また，全国と比べるとほぼ同数となった。

今年の調査結果から，流行発生時期のずれや，

他の地域と異なる流行状況を示す疾患があることも確認され，地域的な発生動向調査の重要性が示された。今後も引き続きデータの集積を行い感染症の発生動向に注意していくとともに，適切な情報の提供を行っていく必要がある。

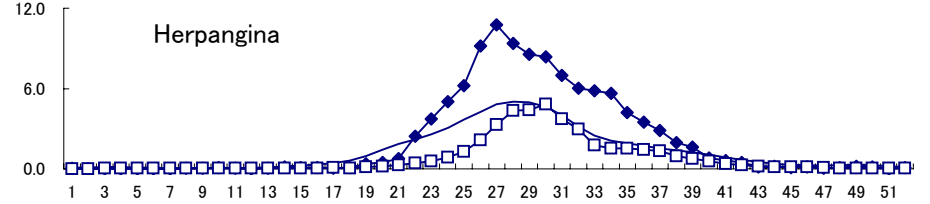
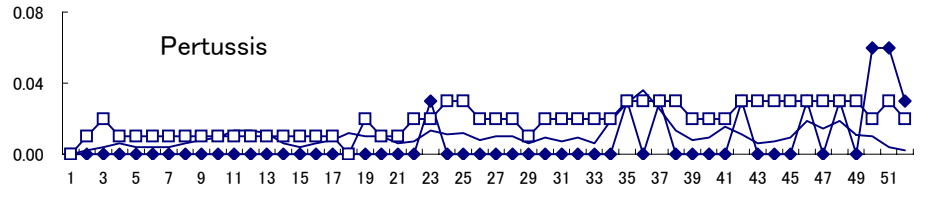
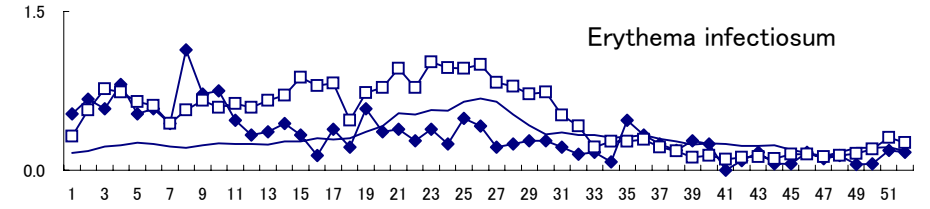
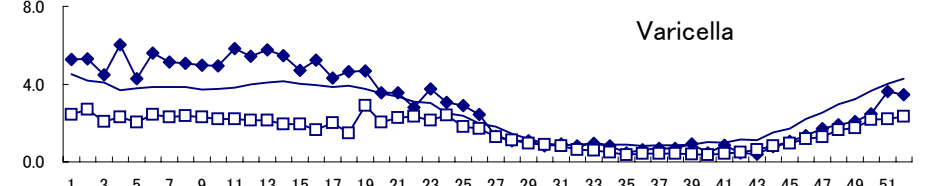
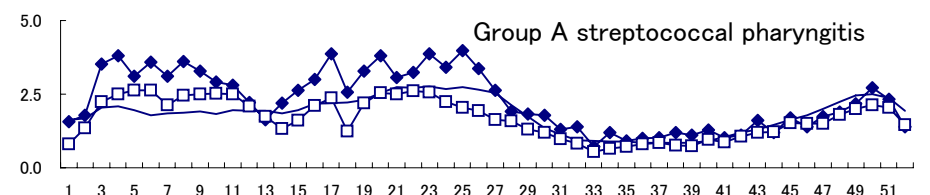
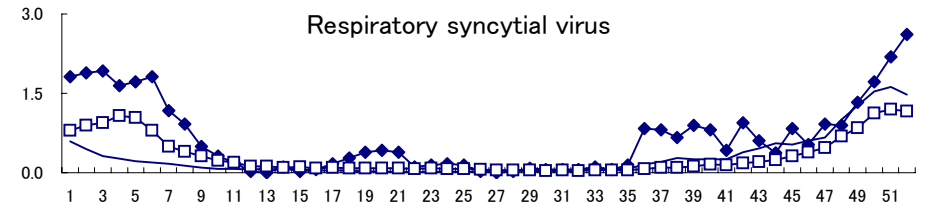
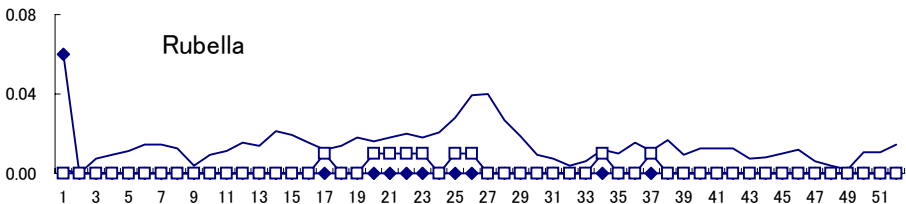
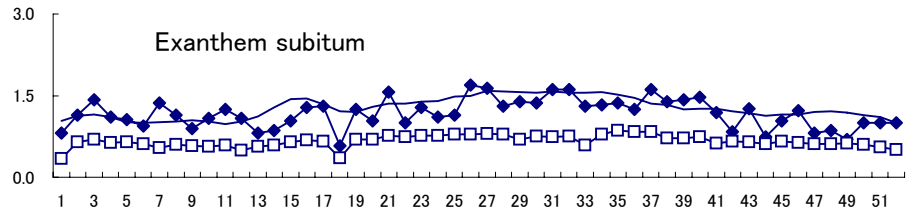
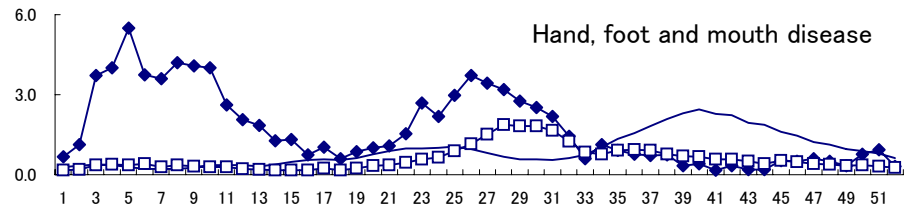
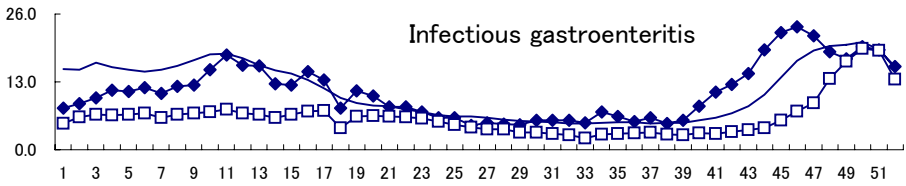
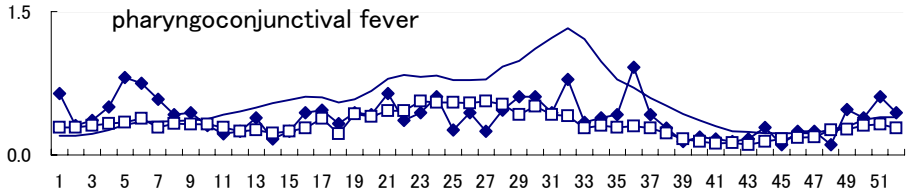
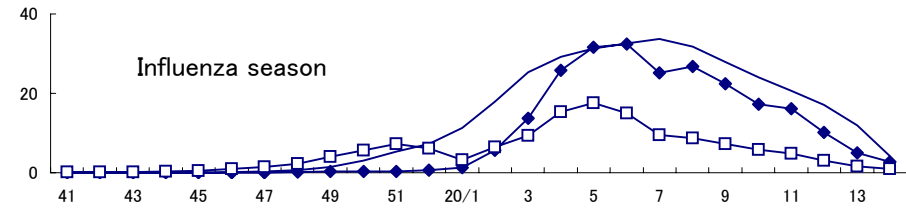
Table 1 The number of the sentinel clinics and hospitals by the health center

Health center	Number of the sentinel clinics and hospitals				
	Influenza disease	Pediatric diseases	Eye diseases	Target diseases	Sexually transmitted disease
Miyazaki-city	15	9	3	1	4
Miyakonojo	10	6	2	1	2
Nobeoka	7	4	1	1	2
Nichinan	5	3		1	1
Kobayashi	5	3		1	1
Takanabe	6	4		1	2
Takachiho	2	1			
Hyuga	6	4		1	1
Chuo	3	2			
total	59	36	6	7	13

Table 2 Summary of incidence of the category V diseases in Miyazaki prefecture.

Disease name	Number of the reports	Number of the reports per a sentinel	Age distribution		The ratio against Miyazaki (2006) (%)	The ratio with average of the past five years (%)	The ratio against Japan (2007) (%)
			Major age group	Ratio※ (%)			
Influenza	14,047	238.1	≤5	38	72	70	171
			6-9	27			
Respiratory syncytial virus	1,231	34.2	≤1	83	165	—	208
Pharyngoconjunctival fever	750	20.8	1-3	56	38	72	125
Group A streptococcal pharyngitis	4,263	118.4	3-7	64	103	125	136
Infectious gastroenteritis	20,924	581.2	6M-5	67	89	98	177
Varicella	5,434	150.9	1-3	64	101	108	185
Hand, foot and mouth disease	3,191	88.6	1-2	57	416	184	286
Erythema infectiosum	621	17.3	4-6	46	68	107	66
Exanthem subitum	2,182	60.6	6M-1	92	97	92	176
Pertussis	11	0.3	≤3	36	56	59	32
			8-14	55			
Rubella	2	0.1	<1	100	62	8	62
Herpangina	3,843	106.8	6M-3	79	213	158	256
Measles	1	0.03	13	100	—	1	3
Mumps	2,023	56.2	2-6	68	52	68	250
Acute hemorrhagic conjunctivitis	3	0.5	30's	67	11	12	40
			50's	33			
Epidemic keratoconjunctivitis	434	72.3	20's-50's	64	42	47	203
Bacterial meningitis	10	1.4	≤9	80	78	87	168
Aseptic meningitis	21	3.0	≤9	71	42	56	194
Mycoplasmal pneumonia	61	8.7	1-9	80	115	112	42
Chlamydial pneumonia	1	0.1	0	100	100	128	13
Measles in adults	1	0.1	20's	100	—	56	8
Genital chlamydial infection	429	33.0	20's-30's	69	87	63	107
Genital herpetic infection	132	10.2	20's-30's	55	101	115	107
Condyloma acuminatum	64	4.9	20's	59	139	158	77
Gonorrhea	162	12.5	20's-30's	70	60	42	108
Methicillin-resistant <i>Staphylococcus aureus</i> infection	394	56.3	≥70's	70	111	126	106
Penicillin-resistant <i>Streptococcus pneumoniae</i> infection	53	7.6	≤4	43	106	98	73
			≥70's	42			
Multidrug-resistant <i>Pseudomonas aeruginosa</i> infection	15	2.1	≥60's	80	150	150	191

※ Ratio for the number of all report.





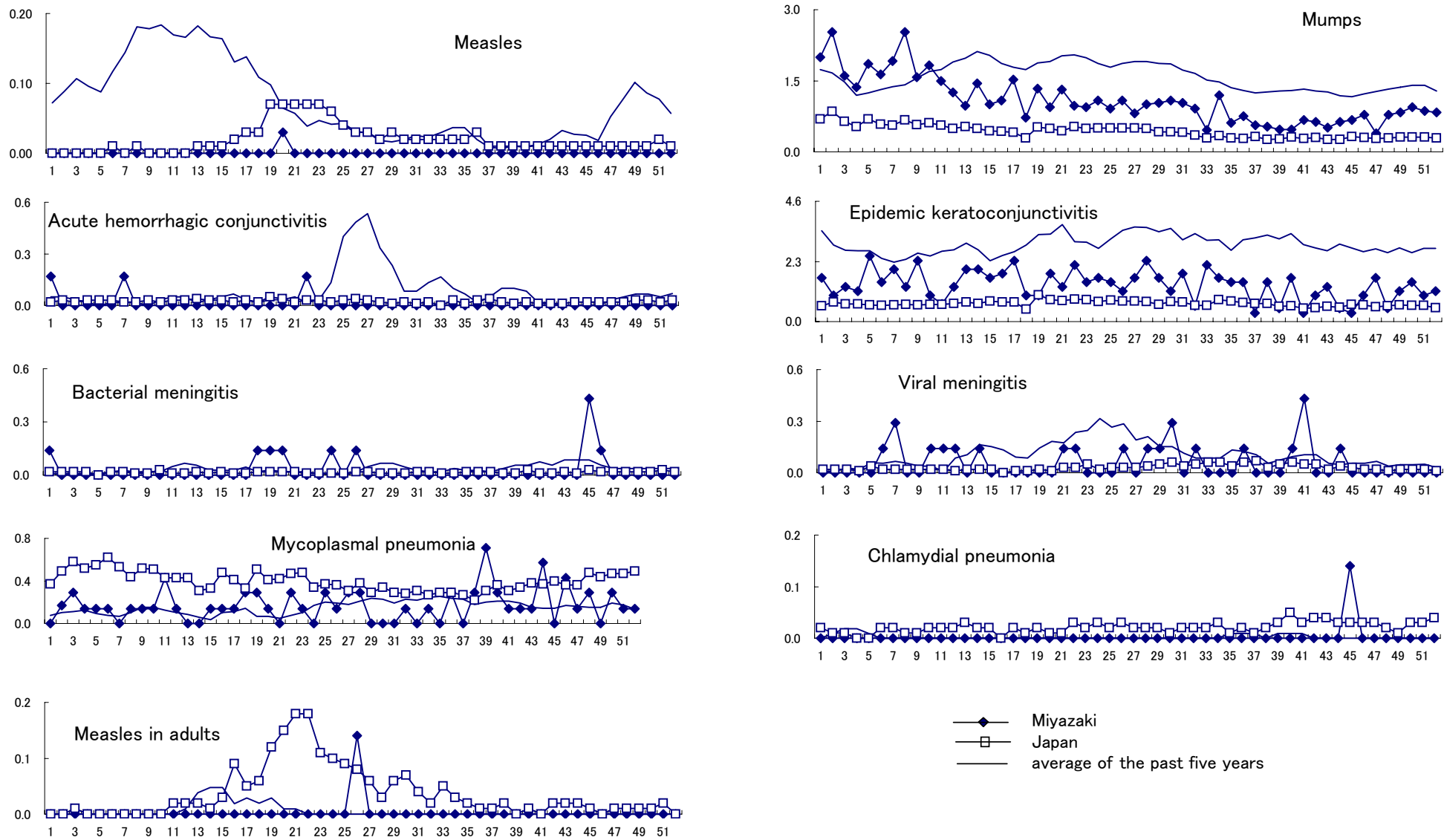


Fig.1 Weekly report of category V Influenza , Pediatrics diseases and Target diseases reported by the sentinel clinics and hospitals.

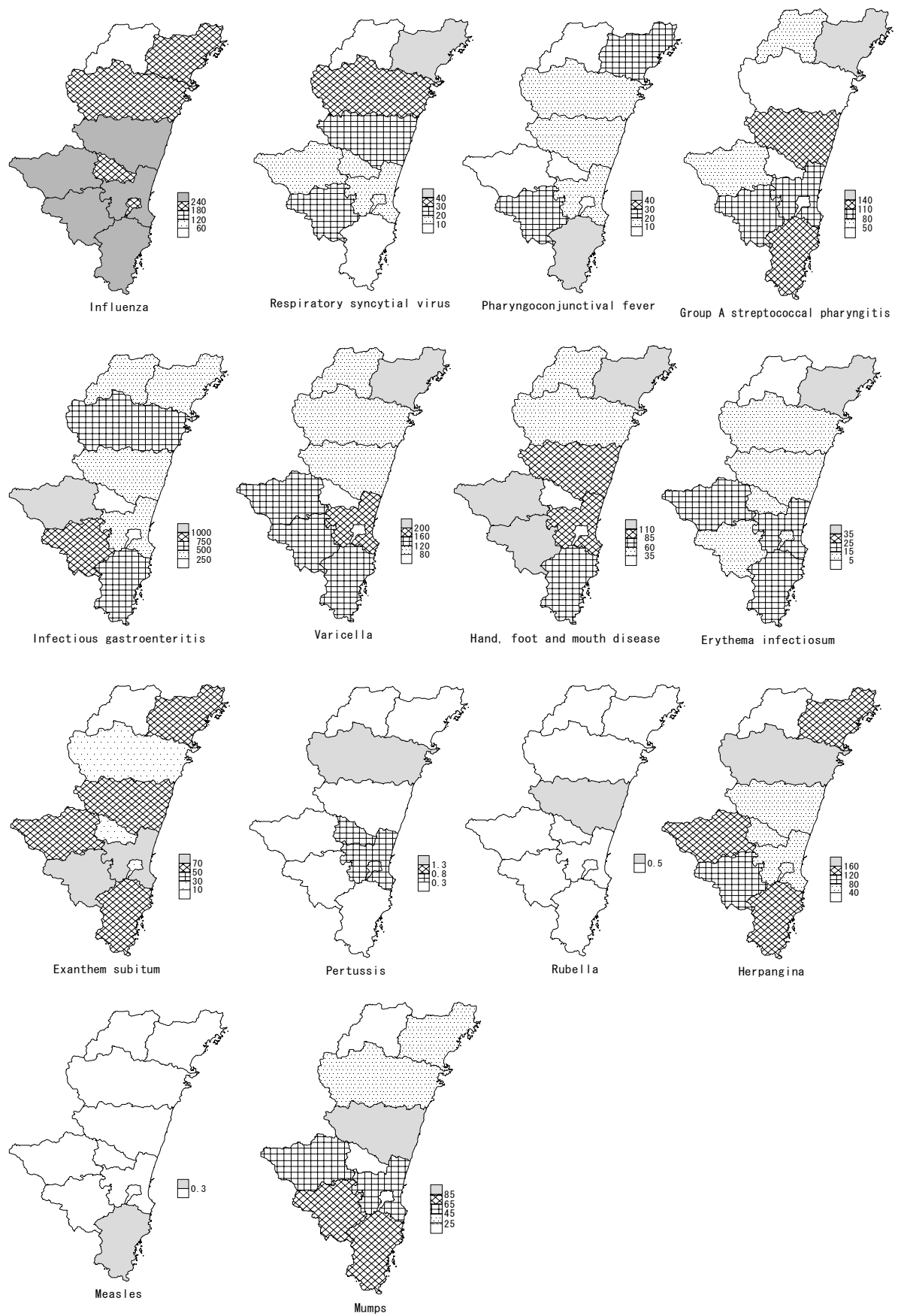


Fig.2 Geographical distribution of the infectious diseases by the health center in Miyazaki prefecture.